

〒183-0034 東京都府中市住吉町 4-47-16

Tel/Fax 042-354-3044

E-Mail fuchu_nakagawara_church@hotmail.com

HP <https://www.fuchu-nakagawara-church.com>

牧会書簡／小会だより／

礼拝式文・説教／

聖書の学び／日々の祈り

2020年4月5日（第二報）

受難週を迎えるにあたり、いかがおすごしでしょうか。教会が閉じられ、4月中は聖餐にもあずかれない中、不安を覚えておられる方もあるかもしれません。主の死から復活の命に至る道を知る私たちは、病や別離・痛みや死が私たちの終わりではないことを信じます。忍耐から始まる命の希望に立って、主の御前に共に日々の祈りを重ねるために、ここに、礼拝式文等をまとめた第二報をお届けします。主の日に始まる家庭礼拝や、聖書の学び、祈りの手引きにお用いください。

目次

目次

牧会書簡（２）敬愛する皆さまへ～受難週を迎えるにあたり.....	1
小会だより（第69回定期東京中会報告）	3
礼拝式文＋説教「神に、命の神に、わが魂は渴く」（4月5日午前10時30分）	5
聖書の学びに関するお知らせ	13
日々の祈り「受難節の祈り～特に入院中の方々や医療従事者のために」	15

牧会書簡（２）

敬愛する皆さまへ

～受難週を迎えるにあたり、悩む私たちは、いよいよ十字架の主を仰いで諸教会と共に祈るべきこと

主の御名を讃美いたします。

今日までいかがお過ごしでしたか。第一報でお伝えしたように、府中中河原教会では、主に

① **命を大切に**し、② **礼拝をいよいよ重んじ**、③ **教会内外の隔ての壁を壊すため**、との三つの理由から、公的な教会活動を4月末まで休むとの決断に至りました。より具体的には、

① 私たちがウイルスに感染しないことはもちろん、「**無症状の感染源**」とならないため、

② 私たちに今後礼拝に通えない日が来ても、御国の民の礼拝共同体に連なる確信と信頼が奪われないことを覚える契機とし、日々**真をもって神を崇める生き方**を求めるため、

③ 教会の外で不安と弱さを抱える人と同じ視座で癒しと支えを期待し祈り、内向きでなく、外から、たとえば様々な事情で既に礼拝に来ていなかった人たちの視座から、神の御前に立ち帰る希望を表明し、**教会の本来の立ちどころである愛を実践する**ため

の措置でした。その意味で、このたびの決断は、同じく「外出自粛要請」を発表した為政者の声に単に従った結果ではなく、**教会の主体性**に基づき、あくまでも、「**神と人とを愛する主の共同体**」であり続けたい、と考えて選び取った、自由な選択肢のひとつであることを確認したいと思います。先に「**告白の事態**」という特殊な神学用語さえ用いて、国家との距離を保ちつつ示したかった「最高の道」は、主の共同体の「**忍耐強い愛**」（**1コリ13**）でした。

さて、その後一週間がすぎました。礼拝に行かない主の日をはじめ、あなたはどう過ごされたでしょうか。牧師としては、上述の決断が「**安息日の主**」（マルコ 2:27-28）の御前にゆるされると信じていても、寂しさや不安を覚えた方が実際問題としてあったのではないか、その場合、一人ひとりのために、私に何ができるかと、揺れ動く心もありました。もしあなたが、この時の過ごし方を悩まれていたなら、そのとき私も同じ悩みを共有していました。そこで、もがくようにして祈り、長老たちといつも以上に朝夕の連絡を取り合うよう心がけたり、教会堂で行った牧師家庭の礼拝動画を試験的に公開配信するなど、具体的には試行錯誤を繰り返しているのです——動画は、ホームページ「最新のお知らせ」（<http://www.fuchu-nakagawara-church.com/>）をご覧ください

牧会書簡（２）

ださい——。ですからどうか、この事態に生じる悩みや痛みを、ご自分の信仰の無さによるとか、申し訳ないことだ、などと考えず、悲しみ感う者と共に感う時を過ごし、ついには喜びの日に顔を合わせて歌い楽しむことができるよう、さらに**具体的な交わりを深める機会**とお考えください。お互いに、電話等の手段で思いを共有しましょう。共に祈り、このときを越えて参りましょう。

さて、可能な方は**東京中会ホームページ** (<https://church.ne.jp/nikki-tokyo/>) をご覧いただくと、今、礼拝休止措置をとる教会でも、礼拝を継続する教会でも、緊急性の物差しにそれぞれ違いがあるものの、**礼拝が私たちにとって、主にあつて神と人の「命」に触れる場である**ことを確認する、近年にない機会になっていることが分かります。また、どの教会も、理由をもってひとつの決断をし、さらに良い道を求めて試行錯誤し、主の御前に絶えず決断の可能性を開こうとしていることも分かります。私たちは、迷う弱さの実情においても、主に委ねようとの信仰的志向においても、他の教会と共有するもの多く、同じ道に生かされることを信じます。今後も諸教会と情報交換をし、（不要不急の問いを超えて）**今何が御心かという本質的な求め**を共に抱いて時を過ごしたい。自分たちの小さな群れのことはもちろん、多様な声また声のなかで、みことばに聴こうとしている**主の体なる世界の諸教会**のために、共に祈りを合わせましょう。

そして、今やはり、教会として一致して、あらゆる境をこえて祈るべき課題があることを、悩ましい現実にかまけて見失わないようにしましょう。私たちは、**苦しみ悩み、心身を病む者のため執り成し祈る**べきあり、そのような人と寄り添い働く者に上よりの助けを求め、弱い者をいっそう苦しめようとする者たちの力が削がれるよう祈ります。不安と憎しみをあおって社会を支配するデモニッシュな諸力には、注意しましょう。おのれの知恵や力でなく、使徒の頼んだ**愛と公正、義と平和の武具**を身につけ闘いましょう。すばらしい**芸術や音楽**は、**笑い・ユーモア**と共に、このような時こそ必要で、心を支える助けとなります。しかしなお力強いのは、受難節にふさわしく、**「苦難の僕」たるメシアの、十字架に至る歩み**を仰ぎつつ、高ぶる者が低められ、倒れ伏す者が立ち上がる、**死から命への大転換を期して日々重ねられるべき、希望に根差した祈り**です。

2020年4月2日 府中中河原教会 牧師 大石周平

小会だより ～第69回定期東京中会報告

—以下、「月報」4月号のために後藤俊文長老が執筆された中会報告を転載します。

- 今年の定期中会は、新型コロナウイルス感染拡大の影響を受けて、大幅に予定が変更になった。3月19、20日二日間の日程が、3月19日一日のみとなり、会場も感染対策として少しでも広い会場との事で、鶴見教会より柏木教会へ変更となった。中止延期の声もあった中で、中会開催のために多くの労を取られた中会議長・書記・常置委員他の関係各位、急な決定にもかかわらず会場の準備をし、提供をしてくださった柏木教会に深く感謝いたします。
- 中会は開会礼拝より開始されたが、新型コロナウイルス感染予防のため聖餐式は中止され、中会議長富永憲司が、説教題「キリストの体の交わり」において、キリストの体としての教会、中会のあり方、特に各地域における教会の交わりについてみ言葉を示された。
- 開会礼拝の後、議事に入る前に議長は発言を求め、日程短縮、会場変更に至った経緯を説明し、議場は受け入れた。その後点呼がなされ、正議員68名中58名の出席を確認し、規則24条6項により中会の成立が宣言された。正議員の点呼の後、員外議員の点呼があり7名の出席が確認された。府中中河原教会よりは、正議員として牧師大石周平・長老後藤俊文、中会委員の員外議員として長老奥野玲子が出席した。
- 議長・書記・常置委員・選考委員等の選挙については、昨年度の選挙の結果を継続する提案（動議）があり賛成多数で成立した。

小会だより ～第69回定期東京中会報告

- 教情報告では、現住陪餐会員数が昨年度より49名減少し1596名となって、減少傾向が続いていることが示された。
- 小会記録審査委員会報告においては、教会のあり方、小会と総会の関係について今後考えてゆかなければならない貴重な指摘があった。
- 下館伝道所解散願の件、同牧師解職願いの件が承認され、家庭集会時代より数えて95年、伝道所として39年の歴史に幕を下ろすこととなった。
- 教職者の異動では、大和教会牧師桑広国の牧師解職願いの件が承認され、5年間牧された大和教会牧師を辞して北海道中会へ行かれることとなった。また、教師吉平敏行・教師試補吉平真理の二名が近畿中会へ行かれることになった。さらに、一名の教師の退職願の件が承認された。
- 「靖国神社問題特別委員会活動募金」に関する建議案が決議された。
- 来賓の挨拶、協議会は中止となり大会議長の「問安の辞」が文書で示された。
- 中会の日程が約半分となり、議事の積み残しが危惧されたが、各委員会が事前準備に大変な労を取ってくださった事もあり、予定された議案については全部審議ができた。人の力によらず御神の御手にゆだねる事を示された思いがする。中会の上に御神の豊かな御恵みとお導きがあまり溢れることを示され、感謝の祈りを捧げる。

礼拝式文・説教「神に、命の神に、わが魂は渴く」

受難週を迎えます。4月5日（日）午前10時半から、主の十字架を仰ぎ、御名を崇めましょう。今回は、「詩編42～43」講解説教の第二回目となります（『聖書 新共同訳』（聖書協会 1987）を使用）。日本キリスト教団出版局による「説教黙想アレティア 詩編24－51編」（2019年105号）の中の、私自身の釈義と黙想が土台となった説教です。礼拝後、できるだけ早く礼拝動画の配信もいたしますので、教会ホームページ上で更新される「最新のお知らせ」をご確認ください。心を高くあげ、今ここに語りかけてくださる主のみことばに、ご一緒に耳を傾けたいと存じます。〔牧師 大石周平〕

招詞 旧約聖書詩編107編1～9節

——主の御前に心をしずめ、みことばに聞くことからこの一週をはじめましょう。

「『恵み深い主に感謝せよ／慈しみはとこしえに』と／主に贖われた人々は唱えよ。主は苦しめる者の手から彼らを贖い／国々の中から集めてくださった。東から西から、北から南から。彼らは、荒れ野で迷い／砂漠で人の住む町への道を見失った。飢え、渇き、魂は衰え果てた。

苦難の中から主に助けを求めて叫ぶと／主は彼らを苦しみから救ってくださった。主はまっすぐな道に彼らを導き／人の住む町に向かわせてくださった。

主に感謝せよ。主は慈しみ深く／人の子らに驚くべき御業を成し遂げられる。主は渇いた魂を飽かせ／飢えた魂を良いもので満たしてくださった。」

讃詠 546

——ご一緒に、讃詠546番（『讃美歌』1954年版）を歌い、主の御名をたたえましょう。

「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、主なる神、
昔いまし今いまし、とわにいます主をたたえん。アーメン。」

祈祷 罪の告白と赦し／聖霊の照明を求める祈り

——全能の神の御前に、私たちの罪を告白し、赦しを求めて祈りましょう。

「全能の父なる神よ、主の御受難を覚えるこの週のはじめに、愛する兄弟姉妹と共に、同じ時に、ひとつのみことばに聴き、祈りをささげる機会を与えてくださることを、感謝いたします。どうか、あなたが親し

礼拝式文・説教 「神に、命の神に、わが魂は渴く」

くこの祈りの共同体の只中にお臨みくださり、聖霊をもって一人ひとりの心を照らし、あなたの義と愛と真とによって満たして下さいますように。

主よ、わたしたちは、みことばに飢え、渇いています。今・ここに、いっそうの不安に揺れる私たちに、語りかけてください。罪のこの世にあって、また、この身にあって、わたしたちは、あなたの御心に反する方向に決定的に傾いており、あなたの命の御言葉によって新たに生きることがないならば、死の陰の谷に転がり落ちてしまうような者たちです。過ぐる一週の歩みの中で重ねてしまった罪を思っても、私たちはあなたの御前に恥じ入り、あなたの一方的な恵みにすがって、赦しを祈り求めるほかありません。私たちは、あなたの招きにもかかわらず、あなた以外の諸力に従い、襲い来る見えない不安に支配されて生きていました。みことばに聴かず、祈ること少なく、ただ自分の思いによって歩み、主なるあなたと隣人へのひたむきな愛に生きることをしなかったのです。

主よ、私は今こそ、ここに、十字架の主をあおぎ、悔いし砕けし心をもって、御前に罪を告白し、弱い私のすべてをあなたにお委ねします。どうか私たちを憐れみ、赦し、癒してください。まことにあなたは、罪びとを招き、失われた者を探し求めて、ついには見出して下さるお方です。御子イエス・キリストをお遣わしになるほどに、世を愛して下さったお方です。御子は十字架上で、あなたの憐れみにみちた救いの御計画を、成し遂げて下さいました。どうか今、御子の十字架の血によって私たちの罪を拭い去り、汚れを洗い清めてください。救いの喜びをもって私たちを満たし、御霊を注いで私たちを聖別し、全世界にいるあなたの子らと共に、感謝をもって御名をほめ讃え、礼拝する者としてください。主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン。」

聖書

——聖書に記された神のみことばに聴きましょう。旧約聖書詩編 4 2 編 2 節から 7 節 A。

「涸れた谷に鹿が水を求めるように／神よ、わたしの魂はあなたを求める。／神に、命の神に、わたしの魂は渴く。／いつ御前に出て神の御顔を仰ぐことができるのか。昼も夜も、わたしの糧は涙ばかり。／人は絶え間なく言う／「お前の神はどこにいる」と。／わたしは魂を注ぎ出し、思い起こす／喜び歌い感謝をささげる声の中を／祭りに集う人の群れと共に進み／神の家に入り、ひれ伏したことを。

なぜうなだれるのか、わたしの魂よ／なぜ呻くのか。／神を待ち望め。

わたしはなお、告白しよう 『御顔こそ、わたしの救い』と。／わたしの神よ。」

礼拝式文・説教 「神に、命の神に、わが魂は渴く」

——つづきまして、新約聖書ヨハネによる福音書 19章 28～30節です。

「……イエスは、すべてのことが今や成し遂げられたのを知り、『渴く』と言われた。こうして、聖書の言葉が実現した。そこには、酸いぶどう酒を満たした器が置いてあった。人々は、このぶどう酒をいっぱい含ませた海綿をヒソプに付け、イエスの口もとに差し出した。イエスは、このぶどう酒を受けると、『成し遂げられた』と言い、頭を垂れて息を引き取られた。」（アーメン）

説教 「神に、命の神に、わが魂は渴く」

神の偉大さを知る者は、同時に自らの小ささを思わされます。そのようにして、詩編 42・43編の詩人は、「わが魂」と「わが神」の双方に向き合っています。あらためて、先週ごいっしょに注目しました詩編 42編 7節の御言葉を、原典の順番を意識した翻訳で確認してみましょう。

「私の魂よ

なぜ打ち沈むのか、なぜ呻くのか。神を待ち望め。

私はなお、神をほめたたえる。『御顔こそ、わが救い』と。

わが神よ。」

（詩編 42編 7節直訳。『聖書 聖書協会共同訳』日本聖書協会、2019年も参照）

神への叫びを重ねながらの、「おのが魂との対話」（左近）が、この詩編において最初に際立つ特長です。詩人は、「神よ」、「わが神よ」と祈り叫ぶ中、神に向き合うほどに、「わたしの魂は」どうなのか、と見つめる作業は深められ、その渴きに目を背けることができなくなってまいります。2節にもその対比が明らかです。

「涸れた谷に鹿が水を求めるように

神よ、わたしの魂はあなたを求める。

神に、命の神に、わたしの魂は渴く。」

ここで詩人は、自らの魂を、雌鹿が涸れ谷の川床であえぐ様子にたとえます。ここで、詩人が実際に見ていた、あるいは思い描いていた情景を私たちが共有するために、いくらか解説調になることをおゆるしください。

礼拝式文・説教 「神に、命の神に、わが魂は渴く」

——「鹿」は、私たちが底本としている写本では男性名詞なのですが、女性形の動詞がこれを受けています。つまり「雄」とも「雌」とも考えられるわけですが、私たちとしては、名詞も本来の女性形語尾が省略されたものと考えて、いちおうこれを「雌鹿」として思い描いておこうと思います。いや、もちろんここで、男女の別が大切だと言おうとしているわけではありません。そうではなくて、こう読むことで、（ヘブライ語では）同じ女性形の単語である「魂」という言葉と、「鹿」という言葉が、より親しく響き合うことに注目します。詩人は、その人が男性であれ、女性であれ、いつか見た哀れな鹿の姿と自分の魂の姿を深くひとつに重ねています。

さらに、受難週ですから、私たちはいくつかの詩編を、たとえばイエス・キリストが十字架上で語られたいくつかの言葉と共鳴するものとして思い浮かべるのですが（たとえば「渴く」という主の言葉と本日の詩編が重なるように思われるわけですが）、中でも特に印象的な「わが神、わが神よ、なぜわたしをお見捨てになったのか」という言葉の源泉となった詩編 22 編を見ますと、その表題は、なぜか「暁の雌鹿」と呼ばれていたそうなのです。もしかすると、42 編の詩人だけでなく、古代に共有された広い知恵の伝統の中で、鹿、とくに雌鹿が、苦難や嘆きの表象として受け止められていたのかもしれませんが。「雌鹿」のような旋律をと言われた古代の音楽家なら、すぐに明るい調べではなく、暗く重い調べを奏で始めたのではないかと想像します。その鹿はしかも涸れ谷にいる、からからに渴き喘いでいる、それは、古代の詩人にとって、極まった苦難と苦悩の表象だったに違いありません。

——なお、「ワディ」とか「ワジ」と呼ばれる「涸れ谷」は、乾燥地帯の間欠河川、つまり、恒常的には水が流れない谷川のことです。ヨブ記には、雪解けの水を鉄砲水のように豊かに溢れさせる谷川が、季節によっては干上がって、涸れ谷となる様子が伝えられています（ヨブ 6:16~17）。想像してみてください。雌鹿は、かつて享受した潤いを心から求めてやってきたのでしょうか、ようやくたどり着いた荒地の谷川には水を見出すことができず、夏の川床に立ち尽くすのです。想像してみてください。その谷川の雌鹿の姿に、深く感じ入る自分の魂があるのだ、と詩人は訴えています。私もまた、潤いを探し求めてきたのだと。見出したと思ったそのところに、実際には満たすものがないと知り、天を仰いでいるのだと。

——ここで、「求める」とか「あえぎ求める」などと訳される語は、旧約中、本詩編とヨエル書にのみ見いだされ、著しい渴きを表す言葉です。宗教改革者マルティン・ルターは、「叫ぶ」と翻訳しましたが、むしろハアハアという苦しい呼吸ばかりで声は伴っていないイメージに近いのではないかと思います。

「全能者による破壊の日が来る」と預言した預言者ヨエルは、その裁きの日について描写するにあたって、こう表現していました。「野の獣もあなたを（あえぎ）求めます。流れ（川床）の水は涸れ／火が荒れ野の草地を焼き尽くすからです」（ヨエル 1:20）。私たちの詩編には、ヨエル書ほどに直接的な終末論的含意はありませんが、極まった渴きが問題であることは共通しています。神を求めてあえぐ魂の渴望は、死や終わりを思わせるほどの、激しさ極まるものだった、のです。

礼拝式文・説教 「神に、命の神に、わが魂は渴く」

ここでの問題は、神が存在するか否かではありません。神がいると認めたとしても、それが私の人間存在の深みにとって関係のない神であれば、意味があるでしょうか。わたしにとって神が本当に「**生ける神**」であるのか、すなわち現実生きて私の魂にまで働きかける神でいてくださるかどうかの問題なのです。

では、そのことをどうやって確かめたらよいのでしょうか。古代イスラエルの人々にとって、「**生ける神**」の現臨の場は、第一には神殿の礼拝の場、祈りの場にほかなりませんでした（詩編 84 : 3）。しかし、それなのに目下詩人は、「**御前に出て、神の御顔をあおぐ**」ことができていないと言っています。つまり、礼拝に参加し、「アロンの祝福」（民数記 6 : 22 ~ 27）に言い表されているような神の祝福と守り、恵みと平和を現実のものとして確認することができていないというのです。「**主が御顔をあなたに照らし、あなたを恵まれますように。主が御顔をあなたに向け、あなたに平安を与えられますように**」、このように祈りの家を満たす祭司の祝福の声を直接聞くことができなくなってから、どれだけの時間がたっていたのでしょうか。そのような状況で、「**あなたの神はどこにいるのか**」と昼夜人から責められるとき、どう応じればよいのでしょうか。礼拝の場、社会の共同体の交わりから引き離された悩み。これは、個人の問題にとどまらず、皆の問題になりうることを、伝染病のゆえに誰もが教会や社会的な共同性から引き離されている今、私たちは知っています。詩人の生きた古代のイスラエルは、病や飢饉、戦争や捕囚などを通して、歴史的にこの思いを知っていました。不条理が支配するこの非常時に覚える「**飢え渴き**」を、彼らは共有してもいたのです。

さて、共通の記憶は、共通のヴィジョンともなって語られます。預言者アモスは、ダンからベエルシエバまでの全イスラエルで「**神は生きている**」という証言が虚しくなる「**終わりの日**」について、こう言いました（アモス 8:11 以下）。「**それはパンへの飢えでも／水への渴きでもなく／主の言葉を聞くことへの飢え渴きなのだ**」。アモス同様に北の地で言葉を紡ぐ詩編 42 編の詩人もまた、「**昼も夜も、私は涙を食物（パン／糧）とする**」と言い、水への渴きの表象に、パンへの飢えの表象を重ねています（詩編 80 : 6 も参照）。問題は、神の祝福の言葉を受けることができておらず、感謝と喜びに満たされているべき魂の器が、むしろ嘆きと悲しみでいっぱいになっていることです。私たちは今そうであるように、過去も未来も、ついにはそのような嘆きに呑み込まれてしまうのでしょうか。

詩人は泣いています。今こそ励ましの言葉が必要な時に、かえって教会から引き離され、病床に磔にされた愛すべき人たちと同じように、昼も夜も泣いています。過去も今も、そして未来も涙で満たされるそのありようが、「**昼も夜も、わたしの糧は涙ばかり**」という一文に表れているかのようです。「**涙**」（42 : 4）は、この詩人においては、同胞だった者に欺かれ、嘲られ、不当な訴えと虐げを受ける現実の中で、神にさえ拒まれたとの思いに苦しみ、自然に溢れてきたもののようです（42 : 10、43 : 2）。ただし、他の詩編と照らすとき、涙には違う側面があることも、確認しておく必要があると思われます。すなわち、さまよう寄留者の祈りを伝える他の詩編では、神が祈り手の涙をご覧になったら黙していらるはずがないという言説（39 : 12）や、祈り手の涙が神の皮袋に蓄えられていくというイメージ（59 : 9）があります。その意味では、涙そのものが神への訴えや促しと捉えられて、ただ悲観的で

礼拝式文・説教 「神に、命の神に、わが魂は渴く」

なく、なお捨てられていない希みに縋るように絞り出されているとも考えられるわけです。あるいはこの涙が、灰かぶりのような当時の宗教的な慣例に伴うものとして、詩人の悔いや神の怒りへの恐れと罪の告白の表明を含意していたとも考えられるでしょう（詩編 102:10）。最も苦しい時に神を疑う弱さにハツとして神に謝罪したり、あなたの御元に立ち帰らせてくださいと懇願したりと、単なる嘆きだけではない様々な涙の味が「密室の祈り」に伴っていることは、経験上想像にかたくありません。いずれにしても、詩人は泣きながら、神を諦めてはいない。神を諦めないから泣き叫ぶのです。

問題の解決は、しかし涙の密室それ自体には存在せず、神が生ける言葉をもって現臨する礼拝に改めて招いてくださり、応じて喜びと感謝をささげるときに示されると詩人は考えています。ではそれは、「いつ」（42:3）のことになるのでしょうか。「いつ」「いつまで」という言葉に始まる疑問文は、やはり、詩編においてはもっぱら、なお残された希望にすぎない悲痛な思いを表明するものです（6:4、79:5、80:5、89:9、47、90:13 など）。肯定的に言うことが許されるなら、やはり詩人には、自分にはない一縷の希望が、神のもとには確かにある（！）と言っているのです。その意味で、「神よ、いつ、いつまでですか」という叫びは、最後の最後に残された信頼の表明です。先週私たちもこの詩編から学んだとおり、この希望に基づく祈りの文脈では、しだいに、過去も未来も悲観すべきものとは思われなくなってまいります。まずは、神の民の導き手として奉仕した過去の礼拝、かつての神讃美の「記憶」が、彼をこの最後の望みに奮い立たせ始めるからです。

著名な聖書学者であるブリュッゲマンは、過去と現在との関係が、このように神と共同体との関わりの中で正しくとらえられるとき、以下の3つの誘惑にうちかつことができるのだと指摘しました（『古代イスラエルの礼拝』、大串肇訳、教文館 144 頁以下）。礼拝共同体から離れた者が陥りやすい3つの誘惑とはすなわち、Ⅰ 記憶喪失（アムネシア）、Ⅱ 硬直した郷愁（ノスタルジア）、そしてⅢ 過去の改ざんです。「記憶喪失」は私たちを根無し草にし、「硬直した郷愁」は私たちを過去に閉じ込める。また「過去の改ざん」は、歴史さえ思い通りにする高慢で私たちを独りよがりにしてしまう。詩人は、それらのいずれにも抗って、自らの過去と現在と未来とに、神の御前で他者と共に生きる健全な道筋を通すために「魂を注ぎだす」（42:5）のです。その祈りの姿は、「主の前に自分の胸（心）の内を注ぎ出していた」と告白したハンナをはじめ、聖書の信実な祈り手に共通します（サムエル記上 1:15、詩編 62:9）。聖書によれば、その祈りはかつてそうであったように今聞かれ、新しい命の誕生に象徴されるような、新たな時代を打ち開く原動力にさえなります。

すこしずつ、まとめに入ります。三点申し上げます。まず申し上げたいことは、教会の礼拝から引き離された涙の日々にあって、最後の望みは、私ではなく神のもとに一縷の望みがあると信じ、祈りを聞きたもう神にむかって「いつ」と問い続けるところにのみある、ということです。

第二に、その祈り続けるための支えとなるのは、記憶です。記憶はたしかに私たちの弱さを思い出させ、明日をおぼろに暗く映し出す側面を持ちますが、しかし、その暗闇のただなかに、灯のような明るい記憶があることを、忘れてはなりません。それは、神が生きておられることを信じた過去。いや、信じられな

礼拝式文・説教 「神に、命の神に、わが魂は渴く」

ったときにさえ、神は私をとらえておられたという事実としての過去です。その過去を記念すること。それが、苦しみと疎外、孤独と悩みの今を支え、未来を「おぼろに」とはいえ、明るく照らし始めます。命の神の記念のゆえに、私たちは現状にもかかわらず、いつか救いの御手が伸べられるとの確信に至るのです。

第三に、救いの確信に至る記憶とは、単なる個人の思い出に終始するものではないことを、ここに注意しておきたいと思います。詩人にとってそれは、共同体と共有した礼拝讃美の記憶です。その意味で、根無し草でない、共通の歴史に根差した記念の出来事が問題なのです。

キリスト教会であれば、共同の礼拝の根拠となるイエス・キリストの十字架と復活の出来事、そこに私たちの救いがあるという「記憶」ないし「記念」が、どのようなときにも、どのようなところでも、わたしたちを支えます。「渴く」といわれて息を引き取られたイエスの出来事を、生ける神のわざとして思い起こすこと。「わが神、わが神、なぜ私をお見捨てになったのか」という言葉は死の絶望で終わらず、命の神への讃美がそこから開かれることになったという聖書的な記憶。嘆きから讃美への大転換を記憶する声また声に、まずは耳を傾けることです。それらの声に促され、私たちは、自らの洗礼時の潤いや信仰告白の瑞々しさ、兄弟姉妹と共に歌った讃美歌の響きを具体的に思い出し、それらが今のわたしを支え、明日への希望に生かしていくことを確認するのです。なお、いわば「教会の記憶」ともいべきこの記念の業には、いまだ教会員のものとなっていない方々も連なることができるはずです。なぜなら、あなたが自覚しておられるか否かに関わらず、あなたの過去にも、生ける神は、生きて働きかけておられたとすることができるからです。イエス・キリストの救いのみわざは、あなたが思い起こすべきあなたの過去の真理でもあります。十字架の主が示して下さったのは、死に直面するすべての者たちの希望でした。神の御前では、嘆きは嘆きで終わらず、死が死で終わらないという十字架上からのメッセージは、過去から今へ、誰に対しても投げかけられています。第二点、第三点によれば、当該詩編は、過去－現在－未来の視座を与えてくれました。それは、詩編 4 2・4 3 編全体の構成にも表れていることを最後にしてきておわります。リフレイン（繰り返しの句）で明確に分かれる三部構成については、すでに言及していたとおりですが、それぞれの部が、昨日—今日—明日の時間の流れをも示していることに注目してください。すなわち、本詩編の第一部では、今日確認しましたように、過去の想起としての喜びと感謝について語られていましたが、第二部に至るとそれが、現在の歌と祈りに展開してまいります。そうして第三部でついに明日の礼拝で、歓喜のうちに琴を奏で歌う詩人の姿が見通されることとなります。来週は、ご一緒に主の復活、イースターをお祝いしながら、今に至る確かな喜びを確認する時を持つことになるでしょう。楽しみにしつつ、今は深く祈りを合わせることにいたします。祈りましょう。

祈禱 感謝／執り成しの祈り

全能の父なる神よ、あなたは天と地とそこにあるすべてのものを作り、これを保ち、支え、くすしい御旨（みむね）をもって導いておられます。またあなたは、今もなお私たちのただ中で大いなる御業を行い、キリスト・イエスの救いにあずからせ、あなたの御元に立ち帰った私たちの魂を、聖霊によって満たし

礼拝式文・説教 「神に、命の神に、わが魂は渴く」

て、新しい命の希望のうちに生かしてくださいます。私たちはいと低きものたちですが、あなたの御業を思い、わたしたちに豊かに確かに注がれている慈しみを思い、御名をほめ、心からの感謝をささげます。

神よ、いま新しい局面にあつて、ただ十字架の主にすがり、祈りつつ歩み出した私たちの群れを、顧みてください。あなた以外のものに、とくに恐れと不安、不満と高慢に支配されることなく、あなたの御子の救いの真理を常に私たちの目の前に覚えて歩むことをえさせてください。

私たちと同じ困難に直面している近隣の諸教会を、そして全世界にあるあなたの教会の歩みを導いてください。とりわけ日常生活を奪われた中でささげられる礼拝を、あなたが祝福してくださいますように。主の体なる教会を励まし、あなたが負いやすくして下さるそれぞれの軛を、確かに担うことができますように。あなたの福音をすべての人々に、とりわけ不安のただ中にいる人々に、宣（の）べ伝えさせてください。悲しむ者ととも悲しむ仕え人を、働き人をお遣わし下さい。

主よ、あなたは、私たちすべての者の必要をご存知であり、それを完全に満たして下さるお方です。心身の病に苦しむもの、とくに入院中の姉妹たちを顧み、励まし、支えて下さい。愛するものを失い悲しむ者、多くの悩みのうちにたたずんでいる者みなを慰めてください。貧しさの中で叫ぶ者、飢え渴いて求めるものを満たしてください。争いの渦に巻き込まれているもの、見えない敵と戦う医療従事者、ゆえなく囚われている者、圧迫されている者、災害後の痛みを負い続けている者を自由にしてください。重責を担っている者、とくに、国々の代表者、人を裁く立場にある者、こどもたちに教えるつとめをになっている者、宗教者、人の上に立っている者が、あなたに対し、真理に対するおそれをもって、事にあたることができますように。新しい歩を始めようとしている子どもたち、若者たちの成長を見守ってください。年をかさねた者たちをはじめ、すべての者を、あなたにある平安のうちに憩わせてください。

どうか私たちを御手の導きの内においてくださり、今日からはじまるこの一週をあなたにささげ、それぞれの生活の場、それぞれ遣わされた場所であなたに仕える者として歩ませてください。そのうえですべてを、あなたの栄光のもとに照らし、御国の完成に役立ててください。主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン。

信仰告白

——ニカイア信条によって、私たちの信仰を言い表しましょう。

「わたしたちは、唯一にして全能の父なる神、天と地と、見えるものと見えないものすべての造り主を信じます。わたしたちは、唯一の主イエス・キリストを信じます。主は、神のひとり子、すべての世に先立って父より生まれ、光よりの光、まことの神よりのまことの神、造られたのではなく生まれ、父とおなじ本質であり、万物はこの主によって造られました。主は、人間であるわたしたちのため、わたしたちの救いのために天よりくだり、聖霊によっておとめマリアより肉体を受けて人となり、わたしたちのため、ポンテオ・ピラトのもと

礼拝式文・説教 「神に、命の神に、わが魂は渴く」

で十字架につけられ、苦しみを受け、葬られ、聖書にあるとおり三日目に復活し、天に昇り、父の右に座しておられます。主は、栄光のうちにふたたび来られ、生きている者と死んだ者とをさばかれます。そのみ国は終わることがありません。わたしたちは、主にしていのちの与え主なる聖霊を信じます。聖霊は、父と子から出て、父と子とともに礼拝され、あがめられ、預言者を通して語られました。また、一つの、聖なる、公同の、使徒的な教会を信じます。罪のゆるしのための唯一の洗礼を告白し、死者の復活と来たるべき世のいのちを待ち望みます。アーメン。」

奉献と祈祷

——主の恵みに対する私たちの感謝と献身のしるしとして、献げものを献げましょう。

(家庭礼拝で席上献金をなさる場合、教会では、礼拝休止措置が終わった後の最初の礼拝でまとめて受付いたします。維持献金やイースターなどの感謝献金、特別献金も同様になります。)

主の祈り

——（「献金の祈り」に続いて声を合わせて）

「天にまします我らの父よ、願わくは、み名をあがめさせたまえ。み国をきたらせたまえ。みこころの天になるごとく、地にもなさせたまえ。我らの日用のかてを、今日も与えたまえ。我らに罪を犯す者を我らがゆるすごとく、我らの罪をもゆるしたまえ。我らをこころみにあわせず、悪より救い出したまえ。国と力と栄とは、限りなくなんじのものなればなり。アーメン。」

頌栄

——頌栄 5 3 9 番を歌い、主の栄光の御名を讃えましょう。

「あめつちこぞりて かしこみたたえよ、みめぐみあふるる 父、み子、みたまを。
アーメン。」

派遣と祝福

「平安のうちに行きなさい。希望と喜びのうちに主に仕え、すべての人に愛を伝えなさい。主イエスは世の終わりまであなたがたと共におられます。」

「主があなたを祝福し、あなたを守られるように。主が御顔を向けてあなたを照らし／あなたに恵みを与えられるように。主が御顔をあなたに向けて／あなたに平安を賜るように。アーメン。」

——以上で礼拝を終わります。報告: **4月13日(月) 神学校入学式**が関係者のみで短縮して行われます。
入学生(全科聴講) 熱田 洋子(北海道中会 佐呂間教会)

聖書の学びに関するお知らせ

木曜日の祈禱会にかわり、こちらに、本号から、聖書の学びの手引きとして、「旧約聖書における病と癒し」と題した文書を載せることを予告しておりましたが、なお準備中です。恐縮ですが、近日中に教会ホームページで公開いたしますので、引き続き、「最新のお知らせ」をご覧ください。

日々の祈り 「受難週の祈り～とくに入院中の方々や医療従事者のために」

教会による「日々の祈り」。今回は奥野玲子長老が、「受難週の祈り～とくに入院中の方々や医療従事者のために」として言葉にしてくださいました。今私たちは、主の御^み苦しみを覚えて十字架を仰ぎ、死の兆^{きざ}しを前に^{おの}慄くすべての人の叫びと訴えに声を合わせ、**祈りの受難週**を過ごします。どうぞ、合わせて、「**主の祈り**」を、夕に朝にお祈りください。

教会のかしらであり、私たちの救い主なる主イエス・キリストの父なる神様、
あなたの御名をほめたたえます。

受難週の中であって、主イエス・キリストが十字架への道を祈り苦しみつつ歩まれたことを覚えます。神様は私たち一人ひとりを生まれる前からご自分のものとして選び取っててくださいました。そしてまことに小さく弱く、欠けだけの取るに足りない私たちのために、罪のない御^{おん}ひとり子をこの世に送り給いました。主イエス・キリストは多くの苦しみと辱めを受けられたのち、私たちに代わって十字架におかかりになり、その死によって私たちを贖い取ってくださいました。十字架の贖いによって、私たちは罪赦され、神の子とされています。聖霊に導かれて、今私たちは主イエス・キリストを神の御子と告白いたします。主イエス・キリストを信じることによるのみ救われ、永遠の命が与えられることを、はかり知ることのできない大きな恵みとして知らされていることを心から感謝し、御名を讃美いたします。

私たちの群れの中に、イースターに至るこの時も入院を余儀なくされ、病の痛みや苦しみと闘っておられる姉妹方がいることを覚えます。どうかその辛さを取り除いてください。命の主が共にいまして慰めと励まし・平安を与え、御心ならどうか癒しの御手をお与えください。現在の状況のもと、お見舞いに行くこともかありませんが、心からなる祈りをもって姉妹方の心に寄り添うことができますようにと切に願います。私たちの群れの外にも病に苦しんでいる多くの隣人がいること、その一人ひとりがあなたの愛する者であることを覚えます。どうかあなたの憐れみをすべての人の上に注ぎ、癒しの御手を差し伸べてください。

そして日本の病院で、また世界中の病院で、感染症と闘っておられる多くの医療に従事する方々のために祈ります。使命感があるとはいえご自分の命を張って、苦しむ隣人たちのために昼夜を分かたず働かれる方々が、どうぞあなたによって力づけられ、慰められ、祝福されますように。どうか同じ病に倒れることがありませんように。神様の癒しの御手が一日も早くこの世に送られ、この嵐がおさまりますように。

「あなたがたには世で苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている。」このみ言葉を心にとどめ、主を礼拝する者たちが高らかに讃美の声をあげながら、顔と顔を合わせて主の御堂に集い、聖餐の恵みにも共に与る日を早く来たらせてください。牧師・長老・教会員お一人お一人の顔を覚え、その日までの歩みが豊かに守られますようにと心から祈ります。

この小さな祈りを皆様の祈りとあわせて、尊き主イエス・キリストの御名によってみ前におささげいたします。アーメン。